

公益財団法人やまがた教育振興財団
「教員養成に関する調査研究事業」
報 告 書

個別最適で協働的な教員同士の学びを実現する 学校研究の在り方

—研究協力校における組織力と個人力の分析を通して—

令和7年3月

山形大学大学院教育実践研究科
准教授 鈴木 貴子

1. 研究の目的

令和3年1月26日、中央教育審議会は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」を答申し、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」、先行き不透明な「予測困難な時代」が到来する中で、2020年代を通じて実現を目指す「令和の日本型学校教育」の在り方を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と定義した。学校教育が、その成果を十分にあげることができるかどうかは、一人一人の教師の力に大きく依存している。「令和の日本型学校教育」を実現するためには、時代の変化に応じた高い資質能力を身に付けた教師を確保し、教師が生き生きと活躍できる環境を整備することが、今後より一層求められる。また、大量退職・大量採用により、年齢構成や経験年数による不均衡が生まれていることから、学校の組織力の強化が求められている。Society5.0時代の学校では、予測のできない非連続的な変化を前向きに受け止めた柔軟な対応が肝要である。高度な専門職であるべき教師の学びの在り方についても、パラダイムの転換がおこっており、一定の前提の下で設計された座学等を中心とする「知識伝達型」の学習コンテンツを受け身の姿勢で学ぶだけではなく、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を重視したスタイルの学びがより重要になってきている。「協議・演習形式の学び」や「地域や学校現場の課題の解決を通じた学びを自律的に求め・深めていく姿勢」、「具体的な経験を振り返って抽象化・概念化し活用していくこと」や「他者との対話を通じながら不断の検証を行っていくこと」の必要性が高まっており、学びのスタイルの多様性の重視は「新たな教師の学びの姿」を構想する上で鍵となる概念である。教師はそもそも学び続ける存在であることが強く期待されており、教職生涯を通じて探究心をもちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続けることが重要視されてきた。子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たす際には、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も求められている。

山形県教育委員会や各市町村教育委員会における教員研修、各地区で実施されている研究主任会等においても、「学校の組織力の強化」や「チームとしての校内研究の推進」、「新しい学力観に基づいた教員研修の在り方」などのキーワードが多く見られるようになっており、「新たな教師の学びの姿」に対する関心の高さや課題意識がうかがえる。

山形大学教職大学院で「学校力開発分野」を選択している現職院生は、若手教員と経験豊かな教員とをつなぐ役割を担う中堅教員が多い。同僚性を生かしてすべての教職員が参画できる校内研究を実現したいという思いや願いをもって意欲的に学んでおり、授業を通して他校の取組を知る中で新たな視点を見だし、着想を得ている姿が見られる。教師の日常的な学び合いは各学校の中で行われることが多いが、教職大学院では、他地区や他校種の教師との学び合いが日常化しており、視点や価値観の違いが自然な対話につながり、自らの教育実践の振り返りを通して、「発見」「意味付け」「捉え直し」が断続的に繰り返されている。それぞれが、主体的、対話的に深く学んでいこうとする姿が見られ、「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ」姿として捉えることができる。このような「学び合いのコミュニティ」の形成は、教師の「主体的・対話的で深い学び」、子供の「主体的・対話的で深い学び」の実現を根底で支え、組織としての取組を活性化させることが期待できる。

本研究では、地区や校種を越えた研究主任が集う「学び合いのコミュニティ」を結成し、

「自ら問いを立て、実践の振り返りや対話、知識の習得を重ねながら、実践を展開することで、自他の価値観を捉え直し、新たな問いや実践に向かう」持続的な探究プロセスを提供する。この新たな枠組みによる「学び合いのコミュニティ」が、各校の校内研究の促進にどのように寄与するのか、さらには子供の学びにどのような影響をもたらすことができるのかについて考察することを、本研究のねらいとした。

2. 研究の概要

(1) 山形大学教職大学院の授業におけるアンケート調査

1 年次現職院生を対象にした授業「学校研究推進の実際と課題」において、校内研究の一環として行われている授業研究会についてのアンケート調査を行った。

＜調査対象：山形大学教職大学院 現職院生（1 年次）16 名＞

授業研究会の現状について

質 問 項 目	非常にあてはまる	大体あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
本校の授業研究は、学校教育目標の具現化につながるものである。	7	7	2	
本校の授業研究は、学年・学級経営と一体的に進めている。	4	6	5	1
授業研究会では、子供の資質・能力について協議されることが多い。	3	9	4	
授業研究会では、教員の資質・能力に資する「学び」が多くある。	3	6	7	
授業研究会では、教師の指導力について協議されることが多い。	1	10	3	2
授業研究会では、全教員が主体的に学び合っている。	2	2	9	1
授業研究会での学びは、自己の課題解決につながる事が多い。	5	8	3	
授業研究会での学びを、日常の実践に生かしている。	5	9	2	
自分が授業を公開するときは、「提案性のある授業」になるよう努力している。	6	9		
自分が授業を公開するときは、学期又は単元全体の見通しの中で、積み重ねてきた日々の授業を提案している。	7	4	4	

授業研究会の課題について

質 問 項 目	非常にそう思う	大体そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
授業研究会は形式的なものになっており、形骸化している。	1	9	2	4
カリキュラム作成や授業づくりに専念できる時間が確保されない。	4	4	7	1
授業研究会が、同僚との学び合いの場になっていない。		6	8	2
授業の何を見て、事後研で何を協議するのか、教員によってバラバラである。	2	6	4	4
授業研究会における研修が、日常の実践や指導力の向上に結びつかない。	3	4	7	2
研究紀要（まとめ）等作成しても、日常の実践の参考になることが少ない。	5	4	6	1
授業研究会の準備等の負担感が大きく、授業公開に消極的な教員が多い。	5	8	3	

これからの授業研究会に対する期待について

質 問 項 目	非常に期待する	期待する	あまり期待しない	期待しない
重点目標を絞り、子供の変容を具体的に評価しながら研究を進めたい。	14	1	1	
年間又は短期（学期毎）の重点目標を達成するためのカリキュラムを作成し、その実践の一つとして授業を公開していきたい。	9	6	1	
カリキュラム作成や授業づくりの時間が十分確保される中で、授業実践及び授業研究会が行われるようにしたい。	15	1		
簡単な指導案、または指導案なしでも互いに授業を公開し、日常的・継続的に授業実践力を高め合う研究にしたい。	11	4	1	
日常の授業実践につながる授業研究会にしたい。	16			
自分を主役に、授業研究会等での学びや自分の実践を綴る「授業ノート」や「ポートフォリオ」を作成しながら進めたい。（個の学びの蓄積）	5	7	4	
ワークショップ型で「成果・課題・改善策」を整理し、改善策について協議した後で、自分の実践につながる整理をすることができる授業研究会にしたい。	10	6		

現職院生の課題意識が高く、改善したいと感じているのは、主に以下の点であった。

- ・学校教育目標と校内研究が一体的に推進されていない
- ・教員の資質能力の向上に資する学びが少ない
- ・教員の主体的な学びには差がある
- ・授業研究会や研究のまとめが形骸化している
- ・授業研究会に対する負担感が大きい
- ・子供の変容を具体的に評価したい
- ・カリキュラム作成や授業づくりの時間を確保したい
- ・日常の授業実践につながる研究会にしたい

(2) 研究主任会の振り返りの分析

研究代表者が講師を務めた研究主任会後の振り返り（対象：41 名）で関心が高かった点は以下の通りであり、現職大学院生のアンケート調査との共通点が見られた。

- ・学校教育目標と校内研究テーマとの関連について
- ・目指す姿を子供と共有していくことについて
- ・授業研究会や事後研究会における学びの質の向上について

- ・研究の日常化や教員の協働的な学び合いについて
- ・次年度につながる校内研究のまとめについて
- ・中長期的な視点をもった校内研究のデザインや組織マネジメントについて
- ・研究主任としてのサーバントリーダーシップについて

(3) 先行実践から考える校内研究の可能性

①校内研究の未来デザイン

先生方によるエンパワーし合える場づくり (Facebook グループ「校内研のミカタ」)

校内研究の課題

- ・研修を推進する立場とそうではない立場の「思い」の部分の乖離や温度差
- ・研究授業を担当する授業者の不安感やネガティブ思考
- ・校内研究にかかる情報の孤島化

課題解決の可能性

- ・個別最適な校内研究 (個人テーマの設定やグループ研究、個に焦点を当てた校内研究のデザイン) の実現
- ・心理的安全性が確保された研究協議会の実現
- ・校内研究の日常化と習慣化 (職員室内の研究コーナー、短時間のミニ校内研、ポータルサイトを活用した情報共有、自分のタイミングでの情報収集) の実現

②DE&I の視点

子供も大人も多様化している中で、ダイバーシティ (多様性) ・エクイティ (公平性) ・インクルージョン (包摂性) の頭文字を合わせた概念 DE&I の概念は、校内研究においても重要になる。大事にしたいポイントは以下の 3 点。

- ・狭義の意味の主体性から脱却する (主体性を発揮できる余地の拡大)
- ・バウンダリー (境界線) を侵害しない
- ・普通の相談ができる組織になる (みんな違うことが前提にあり、多様であることを面白がれる)

③大人と子供の相似形の学びをデザインする対話とリフレクション

- ・東京都東村山市立青葉小学校
ラウンドスタディの導入、リフレクションの共有、学びカフェ、学びのあしあと
- ・立命館小学校
「対話とリフレクション」を軸にした 1 年間にわたる教員研修、メタ認知力を高める「認知の 4 点セット」
- ・上越市立高志小学校
「高志モデル」ワークショップ型の校内研修・レポート、コミュニティの寿命と持続可能なアプローチ (ミニ研修、少人数のセッション、研修日より)

(4) 継続的な「学び合いのコミュニティ」におけるリフレクションの分析

地区や校種を越えた研究主任が集う「学び合いのコミュニティ」を結成し、定期的な研究協議会の開催により、「自ら問いを立て、実践の振り返りや対話、知識の習得を重ねながら、実践を展開することで、自他の価値観を捉え直し、新たな問いや実践に向かう」持続的な探究に挑戦した。(実施時期や会のねらいは以下の通り。)

第 1 回：令和 5 年 12 月 19 日 (火) 午後 1 時 30 分 ～ 午後 4 時 30 分

- ①自校の研究の強みを捉えなおす、②新たな視点で、自校の研究の目的を再確認する

第2回：令和6年2月8日（木） 午後1時30分 ～ 午後4時30分

①自校の研究の強みを捉えなおす、②次年度に向けた研究の構想を可視化する

第3回：令和6年5月30日（木） 午後1時30分 ～ 午後4時30分

①自校の研究の強みを捉えなおす、②昨年度の研究について共有し、今年度取り組みたい内容や方向性について、それぞれの視点から考えを出し合う

第4回：令和6年11月14日（木） 午後1時30分 ～ 午後4時30分

①今年度の研究の中間評価を行い、取組の見直しや次年度に向けた見通しを確認する

②特別講師の話を通して、チームとして取り組むことの価値や可能性について考える
特別講師：加賀市教育委員会地域プロジェクトマネージャー小林湧氏（伴走型支援）

第5回：令和7年3月12日（水） 午後1時30分 ～ 午後4時45分

①新たな参加者との対話で視野を広げる、②中長期的な視点で研究をデザインする

【第5回研究協議会のリフレクションから】

- ・「まずやってみよう」を実践する教員が増え、意欲的に学ぼうとする姿が生まれている。生徒を子供扱いせず、尊重する（ある意味での対等）ことを忘れてはいけない。他校で実践している、生徒目線で「つけたい力」「目標」を具現化するワークショップに挑戦し、ひとりよがりにならない研究を目指したい。
- ・「対話」を大切に研究を進めてきた結果、子供も教師も「やってみたい」が増えてきている。リフレクションの積み重ねが目に見える形を模索したい。
- ・「共創」の視点を大切にしたい。子供たちの思いをしっかりとくみ取って研究を進めている学校がたくさんあり、自分の学校でできることを考えたいと思った。「子供との共創」の視点を校内研究に取り入れると、組織力の向上が期待できそうだ。
- ・「子供を主語にする」と言いながら、今年度の研究は教師主体の振り返りになっていた。子供同士の対話を仕組んだり、子供の思いや願いが書き込める学びの地図やカリキュラム・マネジメント表を活用したり、積極的に子供との共創に取り組んでいるのは中学校での実践ばかりだった。小学校でも子供の声を取り入れた取り組みができるはずなので、チャレンジしたい。

第1回目のリフレクションと比較すると、校内研究の中核に子供を据えることの重要性や可能性を実感し、前向きに挑戦しようとする思いや新たな問いが生まれている変容が見られた。mustではなく will や can の視点が増えているのも大きな変化であった。

3. 研究の成果及び期待される効果

現在行われている研究主任対象の研修会は、地区や校種の枠組みの中で実施されているものが多い。各学校の情報共有にとどまることが多く、それぞれの学校に即した、その学校ならではの深め方を探究的に模索する環境としては課題がある。本研究で結成した、従来の枠組みを超えた「学び合いのコミュニティ」では、他地区や他校種から新たな刺激を受ける機会が保障され、自律的・協働的な学びの深まりが持続し、それぞれの学校の校内研究にはオリジナルのストーリーが生まれた。教職大学院における学び（理論）と各学校における挑戦（実践）の往還を図る上でも、それぞれの学校において新たな教師の学びの姿を実現する上でも、地区や校種を越えた「学び合いのコミュニティ」における対話とリフレクションは有効だと考える。山形大学と県教育委員会が連携して進めている学校組織マネジメント研修でも、地区や校種を越えた「学び合いのコミュニティ」が生まれ、自律的・協働的な学びの深まりが見られている。今後、これらの取組が各地区に広がり、多様な教師の学びの姿が生まれていくことに期待したい。